街郭（がいかく）をわたす楔（くさび）

地域の特徴と分析

風格を演出する多様な「郭」——街を囲み、区切るもの

外堀と内堀、石垣

牛込見附の今昔
（上:1928年、下:2016年Google）

ここは、江戸城の城郭を縁取る内堀と外堀に囲まれた江戸の重要な「郭」であった。田安門から出て北西に続く道はもともと江戸城からの江戸五口のうちの一つ。しかし、現在では外堀や内堀、見附や橋へのヴィスタが通りにくく、これらが重要な都市輪郭であることが分かりにくい。

敷地の塀

塀で囲まれた敷地
（上:江戸名所図会に見る九段坂、下:二合半坂上の現在）

旗本屋敷地であったこの地では、敷地も塀に囲まれた空間構造を持っていた。ただ江戸幕府による塀のデザイン規定があり、塀による整った街並みが形成されていたと思われる。現在でも学校や教会、大使館の塀が多く目立つが、敷地の内部は見通せず、道を歩いていると寂しい。

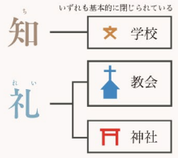
地形の起伏

九段坂の今昔
（上:江戸名所図会、下:Google）

かつてこの地一帯からは富士を眺めることができた。起伏の豊かな地形から周辺の山々への見通しが良く、九段坂上からは江戸湾が見られ、観月の名所として知られた。富士見や二合半坂など、景観にちなんだ地名は今でも残っている。しかし現在では高層ビルの存在でヴィスタは通りにくい。

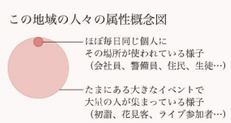
学校や神社・教会が集まるポテンシャル

飯田橋駅から北の丸公園にかけての早稲田通り沿いには多くの学校がある。また敷地内には靖国神社、東京大神宮、九段教会など、著名な神社や教会も多数立地している。本敷地の特徴は大きなポテンシャルを持つ「知」と「礼」という活動が同じ場所に複数共存しているところであるといえるが、現状では、これらの活動は主に敷地内に閉じている。



「常々」と「折々」の活動の違い

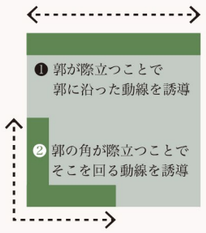
学校、住宅、オフィスが多く、いつもと同じ人がいつもいる飯田橋・富士見の「常々」エリア。たまの武道館のイベントやライブ、観光や千鳥ヶ淵の桜のために久しぶりに来る人々が集まる北の丸公園の「折々」エリア。敷地内には、人々の来る頻度によりこうした分断が存在し、回遊性の低さの一因となっている。



空間に施す操作

郭（かく）を際立たせ魅力的にする

操作



目的

「郭」に沿って動線をデザインし回遊性向上

「郭＝街の敷居」を際立たせることで風格を演出

小スケール

敷地境界とその塀を使う

学校などの敷地境界の塀のデザインコードを定め、街並みの統一を図るとともに新しい機能を挿入する。

中スケール

北の丸公園を囲む郭にアクセスしやすくする

内堀の水面近くにもっと空間を作り、郭の形をさらに感じられるようにする。

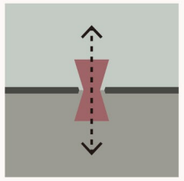
大スケール

東京の骨格たる郭を魅せる

堀や石垣といった東京の郭を緑とともに形づくる。

楔（くさび）を打ち込み領域を繋ぐ

郭に広場など新しい要素を挿入し、2つの領域をつなぐ



目的

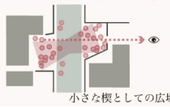
集まる「楔」を増やして回遊性向上

ヴィスタ・正面性の強調で都市景観の風格を演出

小スケール

敷地前の空地をつなぐ

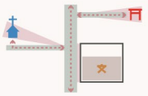
学校やオフィスビル前面にある小さな空地を、道路をまたいでつないでいく。ヴィスタを通し、人が集まれる。



中スケール

道へ向かって滲み出る「知」と「礼」

閉じた学校や奥まった教会や神社の雰囲気が表に滲み出すよう、沿道をデザインする。



大スケール

東京の郭を繋ぐ大きな楔

かつての江戸城を囲む内堀と外堀を繋ぎ、回遊性を生む。

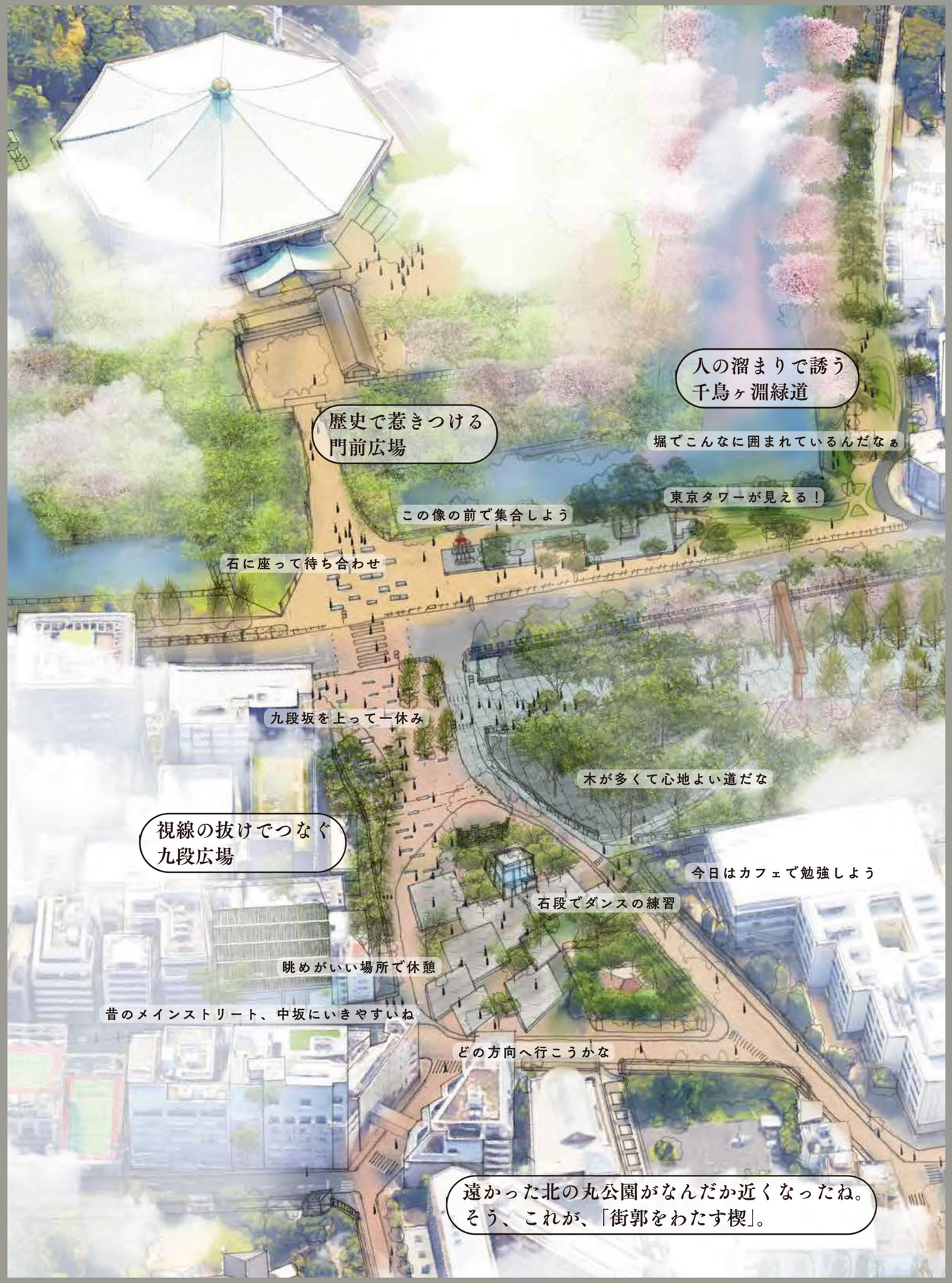
街の将来像

郭（かく）と楔（くさび）　「郭」と「楔」をキーワードに空間デザインを行うことで、

知（ち）と礼（れい）　学校などの「知」の空間と神社や教会などの「礼」の空間をさらに外に開き、

常（つね）と折（おり）　常態的に起こっている活動をきっかけとして、季節の折に触れて起こる活動をも街に引き込む

街のキーパーソン「まもりびと」

江戸城の「見附」があったこの街は、常に番兵が控えているところだった。現在でも、牛込見附跡には交番があり、各学校の門には守衛さんがいる。常にまちにいる「まもりびと」が折々の活動に参加することでこの街の多様性が生まれる

・学校の警備員が在見客の案内
・送り迎えの父母にコーヒー販売
etc...